

## まち歩き支援ツールの開発と実践

- サステイナブル・ツーリズムの構造化に向けて -

○土屋 薫 [江戸川大学] 小久保 温 [青森大学]

キーワード：散策型観光、モバイル web アプリケーション、双方向性

## 1. はじめに

一般に人間の行動を考えたときに、通常は目的に応じて適切な手段をとるものとされている。移動という行動においても同様に考えられるが、その際「適切な」という条件として想定されるのは最短経路である。また先行研究において指摘されているのは、勾配による高低差や踏切・渋滞といった阻害要因に起因する地理的条件である。ただしこれは、手段としての移動の負担を最小限に抑えたい場合にはじめて自明な前提条件となる。たとえば、魅力ある目的地への到達が第一義である場合や移動の経緯そのものが目的である場合、複数の目的地を訪れる際に困難な経路であっても他に選択肢が無い場合など、負担を軽減するという条件は前提でなくなる。レジャー活動・観光行動としての「まち歩き」は、その一例と言える。

「銀ブラ」が「銀座通りをブラブラ散歩する」ことではなく、銀座のカフェ「パウリスタ」にブラジルコーヒーを飲みに行くことを指して大正時代に作られた言葉であることは差し引くとして、特定の目的を持たずにあるエリアを散策することは目新しいことではない。イギリスを発祥とするフットパス・遊歩道の活用や 1980 年代に脚光を浴びた赤瀬川原平ら路上観察学会の活動もそのひとつとして捉えられる。また近年では、2006 年の「長崎さるく博」（「さるく」は長崎弁で「うろつきまわる」の意味）で「まち歩き」は観光の目玉として位置づけられたし、「ちい散歩」（2006～2012 年）や「ブラタモリ」（2008 年～）といったテレビ番組は、「まち歩き」をそれまで以上に一般化させたと言える。

このように、「まち歩き」が市民のレジャー活動の選択肢として定着してきたことを考えると、歩く側、歩かれる現場側双方にとって、「まち歩き」を支援するツールの重要性は高まっている。またそのかたちは、ひとりひとりの嗜好に対応し、かつ歩きながら情報のやりとりができる双方向性を有したものが想定される。そしてこの数年目覚ましいネット環境の改善や「スマートフォン」と呼ばれる携帯電話の普及は、ツール開発の技術的な要件を満たしたと言える。

そこで本研究では、「スマートフォン」に代表される携帯端末を用いた情報提供/ルート探索プログラムを開発し、そのプログラムによるシミュレーション結果と実態との比較検討を試みた。

## 2. 研究の方法

プログラム開発に関しては、端末ごとにアプリケーションを作成するのではなく、インターネットからブラウザするかたちのプログラムを作成することとした。その意味で、現時点でさまざまな携帯端末で動作が確認され、幅広くサポートしている「jQuery Mobile」を用いて JavaScript でコーディングを行った。また、携帯端末の位置情報を扱うために、JavaScript で位置情報を取得できるように標準化された Geolocation API を用いた。

実態との比較に関しては、「まち歩き」一般では統制すべき条件が複雑多岐に渡るため、目的が限定されておりながらも、個人の嗜好と地理的条件によって複数の選択肢が存在する場を用いることにした。具体的には、流山市江戸川台東地区のオープンガーデンをフィールドとして、アンケート調査とともにスタンプラリー方式で来訪者の訪問経路を把握した（2012 年 5 月 18 日～20 日実施）。

### 3. アプリケーションの仕様

リストに登録しておいた地点から訪れたい場所を選び出し、Google Directions API で算出して Google マップに地点マーカーと最適ルートを表示させる。その際、マップへの訪れたい場所の追加と削除は何度でもやり直しができ、また現在位置の表示もできるようにした (図 1)。ただし、Google マップ無料版の上限から、選択できる場所は最大 10 個までの範囲に限られる。

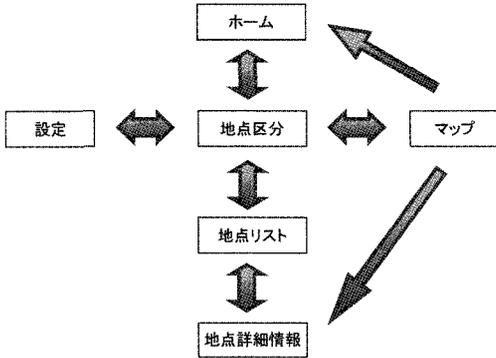


図 1 画面の移動

### 4. 調査結果

来訪者の特徴に関して、アンケート調査によれば、3 日間ののべ回答数 730 件のうち、初めて訪れた人が 57.4%、流山市外からの来訪者が 55.5%、徒歩および自転車による移動 (自家用車以外) が 79.8%、女性が 79.3%、50 歳代 23.4%、60 歳代 45.9%、70 歳代 11.9% となっている。

実際の移動経路に関して、8 地点すべてをまわった人だけを見てみると、地点 C-D 間、D-H 間、C-H 間ではほとんど等距離だが、実際には C-D 間、D-H 間、C-H 間の移動がそれぞれ 178 件、63 件、25 件と大きな偏りを見せている。このことは、今回試験的に順路として A から H の順に案内サインが示されていたことと、経路の単純さやわかりやすい (説明しやすい) 視認指標の存在が原因として挙げられる (地点 D の北側は高木のある公園のため C 地点から目印となるが、C-H 間には小学校があるため直接的な視認は難しい)。

### 5. 考察

地域外からの中高年の初めての来訪者にとって、双方向探索選択型の情報提供は意味が大きく、またそのことによる交流の拡大と維持は、地域に根ざした持続可能なしくみづくりに資すると考えられる。

### 6. 参考文献

小久保温・太田大貴・土屋薫 (2012) : 「散策型観光のためのモバイル Web アプリケーションの開発」『芸術科学会東北支部研究会発表資料』2 号

土屋薫・林香織 (2012) : 「生活行動圏からみたコミュニ

ニティ政策の方向性 一流山美田自治会調査を事例に」『江戸川大学研究紀要』22 号

土屋薫・下嶋聖 (2011) : 「レジャー行動特性に見られる地理的条件の影響 千葉県流山市を事例として」『レジャー・レクリエーション研究』68 号

土屋薫 (2011) : 「レジャー論から見た『オープンガーデン』に関する一考察 千葉県流山市を事例として」『情報と社会』21 号

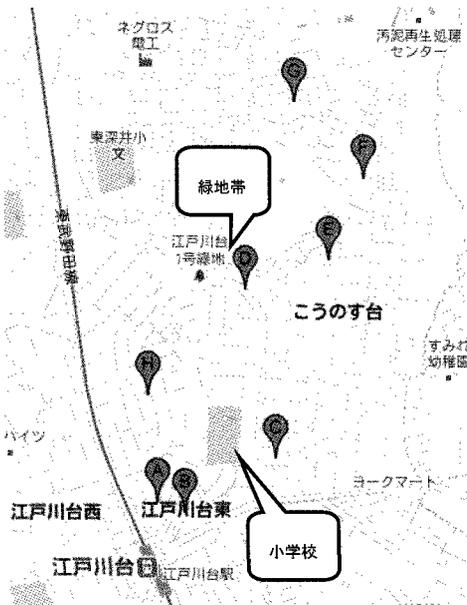


図 2 ポイント表示例